

反復強迫する動物

——夢野久作『ドグラ・マグラ』におけるレイシズムをめぐる

堀 井 一 摩

はじめに

反復は、夢野久作『ドグラ・マグラ』（松柏館書店、一九三五年）を貫く主題であると同時に形式でもある¹。物語は、呉家の祖先である呉青秀と黛・芬姉妹の「変態性慾」がそれぞれ子孫の呉一郎とその婚約者のモヨ子に遺伝しており、それが正木敬之の仕掛けた暗示によって賦活された結果、一郎が祖先の犯罪を反復するという「精神科学応用の犯罪」を中軸に展開する。『ドグラ・マグラ』において、人間の心理と行動は、九州帝国大学の精神医学者である正木敬之の唱える「心理遺伝」の法則によって支配されており、先祖（青秀／黛・芬）の心理を遺伝した子孫（一郎／モヨ子）は、過去と類似した条件下に置かれることで先祖と同じ運命を辿る。楊貴妃に溺れて国を傾けた玄宗皇帝を諫めるために、唐の画家、呉青秀は妻の黛を絞殺し、その死体が腐敗し解体するさまを克明に描いた絵巻を献上しようとする。この未完の絵巻が日本に伝えられ、これに触発された青秀の子孫の一郎によって、千年前の先祖の兇行が現代に再現されようとする。正木敬之は、自らの学説を証明するために、一郎にさまざまな暗示を与えることでこの犯罪を惹起しようとし、他方、法医学者の若林鏡太郎も、記憶喪失に陥った「私」の記憶を回復させることで「精神科学応用の犯罪」という自己の学説の実証をもくろむのである。

『ドグラ・マグラ』は、このような物語内容上の反復を形式上の反復によって構成している²。このことは、「ブウウ————ンンン」という時計の時鐘音によって冒頭と結末が接続する物語の円環構造によって象徴的に示されている³。この柱時計の音は、冒頭で「私」を覚醒させて物語の胎動を告げると同時に、小説の末尾で再び鳴り響き、「私」の脳裏に不気味な記憶を喚起しながら物語を締めくくりつつ、読者をふたたび冒頭へと送り返す。原田邦夫は、『ドグラ・マグラ』におけるさまざまな「同心円の反復」が、「細胞がみずからのうちに進化の全過程を凝

¹ 『ドグラ・マグラ』からの引用は、ちくま文庫版『夢野久作全集9』（筑摩書房、一九九二年）に拠る。引用に附した傍点は、断りのないかぎり原文のものである。本文の引用に一部差別的表現が含まれているが、原文の歴史性に鑑み、そのままとした。ご寛恕を願いたい。

² 養老孟司も、「小説全体が形式の上で循環すると同時に、その中でのできごとまた循環する」と述べている。養老孟司「果てしない循環」『夢野久作全集9』筑摩書房、一九九二年、六四八頁。

³ これに対して伊藤里和は、冒頭と末尾の時鐘音の差異に注目しながら、悪循環する時間性とは異なる「不確かな未来への指向性」を読み取っている。伊藤里和『夢想の深淵——夢野久作論』沖積社、二〇一二年、一九〇—一九一頁。

縮して包含していることを小説の形式のうえで実現し」ていると指摘しながら、この小説が「最初と最後の文によって無限の円環運動のなかに閉じ込められ」ることで、「冒頭から結末へと進む一筋の線」という物語の通念を解体すると論じている⁴。また、中条省平は、「冒頭は結末へ、結末は冒頭へ、永遠に回帰しつづけ」という物語の時間を「ニヒリスティックな時間の構造」と指摘している⁵。実際、『ドグラ・マグラ』における円環構造を象徴する柱時計は、過去の犯罪を否認なしに反復する「私／呉一郎」のメタファーとして描かれている。

扉の外は広い人造石の廊下で、私の部屋の扉と同じ色恰好をした扉が、左右に五つ宛、向い合って並んでいる。その廊下の突当りの薄暗い壁の凹みの中に、やはり私の部屋の窓と同じような鉄格子と鉄網かなあみで嚴重に包まれた、人間の背丈ぐらいの柱時計が掛かっているが、多分これが、今朝早くの真夜中に……ブウンンと唸って、私の眼を醒まさした時計であろう。どこから手を入れて螺旋ねじをかけるのか解らないが、旧式な唐草模様の付いた、物々しい恰好の長針と短針が、六時四分を指し示しつつ、カックカックと巨大な真鍮ふりの振子球こだまを揺り動かしているのが、何だか、そんな刑罰を受けて、そんな事を繰り返させられている人間のように見えた。

ここでは、「私の部屋の窓と同じような鉄格子と鉄網で嚴重に包まれた、人間の背丈ぐらいの柱時計」と、正木の暗示によって先祖の凶行を反復した結果、「鉄格子と鉄網」の中に監禁されている「私」（一郎）とが重ね合わされている。「私」は、先祖代々の心理遺伝によって支配され、正木によって暗示という「螺旋」をかけられることで、過去の記憶を機械的に「繰り返させられている」「真鍮の振子玉」なのである。

また、入れ子による反復構造も『ドグラ・マグラ』を貫く形式的特徴である。若林に連れられて行った正木の教授室で「私」は「ドグラ・マグラ」と題された冊子に目を留めるが、若林の説明によればそれは、「精神病院はこの世の活地獄」という事実を痛切に啜あらわした阿呆陀羅經きょうの文句、「[世界の人間は一人残らず精神病者]という事実を立証する精神科学者の談話筆記」、[「胎児を主人公とする万有進化の大悪夢に関する学術論文」、[「脳髄は一種の電話交換局に過ぎない」と喝破した精神病患者の演説記録]、「冗談半分に書いたような遺言書」、[「唐時代の名工が描いた死美人の腐敗画像」、[「その腐敗美人の生前に生写しともいうべき現代の美少女に恋い慕われた一人の美青年が、無意識のうちに犯した残虐、不倫、見るに堪えない傷害、殺人事件の調査書類」という内容をもつ原稿であり、小説『ドグラ・マグラ』と同様の内容と構成をもつことが示唆されている。注目すべきは、部分が全体を含み、それを反復する——あるいは、全体が部分を再帰的にくり返す——という入れ子による反復構造が、文字通りの入れ子のイメージとしても変奏されている点である。たとえば、「鉄格子と鉄網」の内部に監禁され、同じ運動を反復

⁴ 原田邦夫「ペダントリーの饗宴——あるいは文学機械としての博識」、山路龍天・松島征・原田邦夫『物語の迷宮』東京創元社、一九九六年、二四一—二四二頁。

⁵ 中条省平「自我なき迷宮の構造——夢野久作『ドグラ・マグラ』を読み解く』『文學界』二〇〇一年一月、一七二頁。

する「振子玉」（傍点引用者）としての「私／一郎」、先祖代々の記憶を「母の胎内で見ている」胎児という入れ子⁶、さらには、「如月寺の弥勒様の胎内に在る」（傍点引用者）絵巻という入れ子——そして、このような入れ子構造の究極の形が人間の身体であり、それは人類の進化の全過程を記憶する細胞を入れ子としてもつがゆえに、人間（全体）は細胞のもつ記憶（部分）を現在時において反復してしまうのである。

円環構造や入れ子構造のほかにも、M（正木）／W（若林）などの文字形態の分身性⁷、頭韻（面黒楼万児）・脚韻（ドグラ・マグラ）などの韻律の反復や、解放治療場とその外部の世界とのフラクタル構造も⁸、広い意味での反復の形式と考えることができよう。冒頭が末尾に食らいつくウロボロス構造、小説のところどころで不気味に反響する韻律、あるいは入れ子による同一構造の反復によって、『ドグラ・マグラ』は読者をめくるめく「堂廻目眩」「戸惑面喰」に誘い込む。このように『ドグラ・マグラ』の主題上の反復は、強迫観念的に反復される形式と不可分に連動しているのである。

このような特徴は、ミリ・ナカムラが指摘しているように、フロイトの「反復強迫」という概念と共振している⁹。「反復強迫」とは、主体が過去の外傷的経験を、それが不快であるにもかかわらず、強迫的に反復してしまう現象を指している。フロイトは、「異なる人物と同一化した結果、自らの自我に混乱をきたしたり、あるいは自分の自我を他人の自我で置き換えてしまうこと、つまり自我の二重化、自我の分割、自我の交換であったり、最後に、等しきものの絶えざる回帰、同じ容貌・性格・運命・犯罪行為、いや同じ名前まで何世代にもわたって連続して反復されるという事態」¹⁰を「不気味なもの」の例として挙げている。『ドグラ・マグラ』においても、一郎が青秀という不気味な分身に取り憑かれた結果、「自我の交換」が行われ、「同じ容貌・性格・運命・犯罪行為」の反復、つまりは反復強迫（「等しきものの絶えざる回帰」）が引き起こされていく。したがって、この小説は必然的に、「私は誰か」というアイデンティティの問題をめぐって旋回することになる。

『ドグラ・マグラ』の先行研究においても、主人公のアイデンティティの問題に関心が集中し

⁶ 「胎児の夢」については以下の行論を参照。小説の末尾では、「俺はまだ母親の胎内に居るのだ。こんな恐ろしい「胎児の夢」を見て藻掻き苦しんでいるのだ」と「私」が述懐するように、物語内容全体が胎児という入れ子の夢かもしれないことさえ示唆されている。この説が正しいとすれば、『ドグラ・マグラ』の物語内容の一切を母の——おそらくはモヨ子の——胎内で夢見るこの胎児は、「私／一郎」の記憶をもっている以上、一郎の子孫ということになる。

⁷ 正木と若林の分身関係については、石井和夫「ドグラ・マグラ」論——MWの世界」（『国文学解釈と教材の研究』一九九一年三月）が詳細な議論を展開している。これにつけ加えるならば、「正木」と「若林」、また、「黛」の「代」と「芬」の「分」という漢字の形態も反復や分身の主題を象徴的に示している。

⁸ 正木は、「地球表面は狂人の一大解放治療場」という談話を発表し、「精神病患者と五十歩百歩の人間でない者は居ない」と述べている。したがって、『ドグラ・マグラ』において、「普通人」の住む世界は、「狂人」が存在する「解放治療場」の相似形、すなわち反復であることになる。

⁹ Miri Nakamura, "Horror and Machines in Prewar Japan: The Mechanical Uncanny in Yumeno Kyusaku's *Dogura Magura*," in *Robot Ghosts and Wired Dreams: Japanese Science Fiction from Origins to Anime*. Edited by Christopher Bolton, Istvan Csicsery-Ronay Jr., Takayuki Tatsumi. University of Minnesota Press, 2007, p.15.

てきた。たとえば、鶴見俊輔は『ドグラ・マグラ』を「自分をさがす探偵小説」であり、「主人公は、狂人で、自分の名前を知らず、自分が誰であるかを知らない」¹¹と指摘し、由良君美は「『ドグラ・マグラ』は〈自己確認〉の小説である——それも、自己確認がついに不能となる時点の、執拗な探究の小説である」¹²と論じている。たしかに、過去の記憶を失った主人公はアイデンティティ・クライシスの只中に置かれていると言えるだろう。また、「私」(一郎)が先祖(青秀)の心理遺伝の支配下に置かれているとき、彼の自我の統合は失われているようにみえる。しかし、それでもやはり、「僕はキチガイかも知れませんが日本人です。日本民族の血をうまわっているという自覚だけは持っています」と言って正木を糾弾する「私」のナショナル・アイデンティティだけは、いささかも揺らいではない。「私」は、パーソナル・アイデンティティ崩壊の只中で、「日本民族」というナショナル・アイデンティティを唯一の拠り所として、「非人道的な研究」に手を染める正木と対決しているのである。他方、李珠姫が指摘しているように、一郎の犯罪の起源は中国(中国人特有とされる変態性欲)に求められ、彼の狂気は「正木の精神医学的表象によって異人種のラベルを貼られ、さらに性的過剰のイメージを与えられる」¹³。このように、『ドグラ・マグラ』において、日本人の本質としての「良心」が担保される一方で、悪としての犯罪は他民族・他人種に外部化されているのだ。

しかし、『ドグラ・マグラ』の世界においては、誰もが誰かの生まれ変わりであり、あらゆるものが何かの反復であったはずだ。そうだとすれば、日本人や中国人といった民族や人種のも概念も、「私」のパーソナル・アイデンティティと同様に、つねにすでに危機に瀕していることにならないだろうか。以下では、この小説に書き込まれた心理遺伝を動物の反復強迫という角度から検討することを通して、『ドグラ・マグラ』における人種・民族の概念が不安定化していくことを明らかにしていきたい。

1. 「反復強迫」としての心理遺伝

『ドグラ・マグラ』を統括する反復の原則は、正木の卒業論文「胎児の夢」の中に記されてい

¹⁰ジークムント・フロイト「不気味なもの」、須藤訓任・藤野寛訳『フロイト全集 第一七巻』岩波書店、二〇〇六年、二七頁。フロイトは、不気味なもの(unheimlich)とは、かつて親しく馴染んでいたもの(heimlich)が個体発生的にも系統発生的にも文明化の過程でいったん抑圧された後、何らかの契機に不意に回帰したものであり、それに直面した文明人が感じる不安や恐怖が不気味さの核心にあると論じている。なお、先行論では『ドグラ・マグラ』における心理遺伝論とユングの「集合的無意識」の概念との関連が指摘されてきた。狩々博士『ドグラ・マグラの夢』三一書房、一九七五年。ただし、伊藤里和は、ユングとの実証的な影響関係は確認されないと指摘している。伊藤、前掲書、一九六—一九九頁。なお、「不気味なもの」の原文は一九一九年に発表され、翻訳は一九三一年に「気味悪さ」というタイトルで出版されている(大槻憲二訳『フロイト精神分析学全集第六巻 分析芸術論』春陽堂、一九三一年)。近代日本におけるフロイト受容に関しては、一柳廣孝『無意識という物語』(名古屋大学出版会、二〇一四年)に詳しい。

¹¹鶴見俊輔「ドグラ・マグラの世界」、西原和海編『夢野久作の世界』沖積舎、一九九一年、一四〇頁。

¹²由良君美「自然状態と脳髓地獄」、西原編、同書、三四九頁。

¹³李珠姫「他者」のナショナリズム：夢野久作『ドグラ・マグラ』における精神病の表象』『文学研究論集』二〇一四年二月、七〇頁。

る。胎児の夢とは、母胎の中の胎児が原生動物から人間に至る進化の記憶を夢見するというもので、個体発生は系統発生をくり返すというE・H・ヘッケルの「反復説」を援用したものである¹⁴。

正木は、母親の胎内に宿った胎児は単細胞の微生物から、魚類、両生類、哺乳類といった生物の進化の段階を経て人間の姿に至るとヘッケルを祖述しながら、系統発生の反復によって形作られた人間の身体の内부를細かに観察してみると、感覚器官や臓器の構成が「下等動物から進化して来た吾々の先祖代々、魚、爬虫、猿等の生活器官の「お譲り」である」ことが判明するという。しかし、正木の独創性は、動物を含む先祖からの遺伝を人間の心理にも見ようとするところにある。「人間の皮なるものを一枚剥ぎ取ってみると」、「人間の遠い遠い祖先である微生物が、現在の人間にまで鍛い上げられて来た、驚くべき長年月に亘る自然淘汰、生存競争の大迫害に対する警戒心理、もしくは生存競争心理」が現れてくるというのである。

人間の精神は祖先の心理遺伝が堆積した地層をなしており、「文化人の表皮」の下には「野蛮人、もしくは原始人の生活心理」が潜在している。さらにその下層には「禽獣」の心理、虫の心理、原生動物の心理があり、正木はこの三つを「動物心理」と総括している。文化の下層にある原始人や動物の心理は不活性のものではなく、現在を生きる人間を無意識的に規定している。それゆえ、人間の精神生活を観察してみると、「人体細胞の中に潜在している祖先代々の動物心理の記憶が、再現したものに他ならない事が発見される」。原始人の心理はたとえば好戦性や残忍性として、「禽獣」の心理は弱肉強食的な敵対性や狡猾性として、虫の心理は卑小な自己防衛の本能として、原生動物の心理は妄動的な集団性となって現れる。つまり、「文化人」の装いをこらした人間の行動の大部分は、「細胞の潜在意識」としての過去の「動物心理の記憶」が「再現」したものであるというのだ¹⁵。

以上のように、『ドグラ・マグラ』においては、人間の心身は鶴のように複数の動物たちによって構成されているという人間観が提示される。そして、複数の動物の精神的・身体的ハイブリッドとしての人間は、自己の内に入れ子として潜在する動物性を現在時において反復していくのである。

胎児の夢とは、細胞の一つひとつに蓄積された潜在記憶が進化の夢として再現されるというものである。しかし、「人間の胎児が、母の胎内で見て来る先祖代々の進化の夢の中で、一番よけ

¹⁴『ドグラ・マグラ』におけるヘッケルの影響は、養老孟司「『ドグラ・マグラ』の科学——脳・発生・進化・遺伝と時間」（『ユリイカ』一九八九年一月）、ならびに、頼怡真「宮沢賢治「ペンネンネンネン・ネネムの伝記」と夢野久作『ドグラ・マグラ』の比較研究——ヘッケル、名刺、銀時——」（『九大日文』二〇一三年一〇月）を参照。

¹⁵「欧米各地の大学校を流れ渡って、心理学や遺伝学、又はその頃から勃興しかけていた精神分析学などを研究し」ていたという正木の、このような発想には、ヘッケルとともにフロイトの影響がある。フロイトもヘッケルの反復説にもとづきながら、個人の精神の発達は人類のそれを反復すると確信していた。幼年期のナルシシズムやエディプス・コンプレックスを克服することで成人となる個人の発達は、原始社会における同様の段階を経て文明社会に発展していく人類社会の発達の要約的反復だと考えるのである。ヘッケルのフロイトへの影響に関しては、福元圭太「個体発生・系統発生・精神分析：エルンスト・ヘッケルの思想（2）」（『言語文化論究』二〇〇一年七月）を参照。

いに見るのは悪夢でなければならぬ」と書かれているように、それは人類がこれまで経験してきた外傷的体験の反復として再現される。しかも、母胎に監禁された胎児に、この悪夢から逃れるすべはない。

その内容は、祖先の動物が進化の過程で経験した恐怖、祖先の人間が生存競争を生き抜くため、あるいは、様々な欲望に突き動かされて犯したあらゆる罪業である。まず、単細胞の微生物が、魚類、両生類、哺乳類へと進化するそれぞれの段階で経験した「生存競争の苦痛」や「自然淘汰の迫害」を追体験する。そして、人間の姿になっても、「胎児の先祖代々に当る人間たちは、お互い同志の生存競争や、原人以来遺伝して来た残忍卑怯な獣畜心理、そのほか色々勝手な私利私慾を遂げたいために、直接、間接に他人を苦しめる大小様々の罪業を無量無辺に重ねて来ている」ため、そのような「血みどろの息苦しい記憶」が胎児の主観に再現される。胎児は、まるで戦争神経症を病んだ患者のように、祖先の加害体験・被害体験の一切を胎内で経験するというのだ。

そうだとすれば、胎児の夢は、トラウマの強制的反復であるという点で「反復強迫」と同様の性格をもつといえるだろう。しかも、この反復強迫は単起的なものではない。すでに確認したように、心理遺伝は、現勢的な力として誕生後の人間に働きかけるからだ。胎児は、細胞の中に堆積した過去の記憶を、誕生後にも反復する。過去は現在に嵌入して、主体の現在・未来を規定する。その意味で、未来（誕生後の胎児）は過去（胎児の夢）の中にすでに孕まれているのである。

心理遺伝の現勢力について、正木は「空前絶後の遺言書」の中で次のように語っている。

ところが、こうしたアイタイズくめの文化人の包装は、その低級深刻にして、奔放無頼なる心理遺伝の内容を洩らすまいとして、いつも一パイに緊張している。その苦し紛れに、ソツと少し宛、息を抜きながら、人前だけを繕って知らぬ顔をしているのが普通人であるが、それがトテも我慢し切れなくなって、どうかした拍子に大きく破れる事がある。それが個人では癩癩、脱線、喧嘩、殺傷、詐欺、泥棒、姦通その他の背徳行為となり、破れて復旧しないものは精神異常者となり、大勢の間では暴動となり、戦争となり、悪思想となり、頹廢的風潮となる。こうした心理遺伝の曝露の実例は、毎日の新聞でウンザリするほど見せ付けられているであろう。

ここで、文化は先祖の心理遺伝の発現を制御する装置であり、抑圧の機能を担うものと定義されている。しかし、「先祖代々の動物や人間から遺伝して来た、色々な動物心理や民衆心理」は、ときにこの抑圧を破って噴出する。文化（という超自我）のコントロールが緩んだときに、「心理遺伝の幽霊」が立ち現れるのだ。『ドグラ・マグラ』に漂う不気味さは、馴染みのない他者——しかし、実は自己にとって親密な、自分の先祖——が自己の内部に棲みついて、その不気味な分身が、自己のあずかり知らぬところで自分をコントロールしているのではないかという不安に関係している。

フロイトは「快感原則の彼岸」（一九二〇年）で、主体が過去の外傷的出来事に固着し、それを強迫的に反復してしまう「反復強迫」に注目している。たとえば、災害神経症患者や戦争神経

症患者は、災害時や戦場での過酷な体験が心的外傷となり、それを夜ごとの悪夢に見る。不快な経験であるにもかかわらず否応なく反復させられるという意味で、それは「快感原則の彼岸」を指し示すものであり、患者は外傷的経験の機械的な反復を余儀なくさせられる。

分析治療の現場において、「反復強迫は、〔中略〕忘却され抑圧されたものを呼び出したいという、「暗示」によって促進される欲望に支えられている」¹⁶。つまり、被分析者（患者）は、分析家の「暗示」に促されて、「抑圧されたもの」すなわち過去のトラウマを、分析家を相手に再現するのである。このあたりの事情を、フロイトは論文「想起、反復、反芻処理」（一九一四年）で、次のように述べている。

そこでは被分析者は、そもそも、忘却され抑圧されたものを想起するのではなく、これを身をもって演じるのである。被分析者はそれを、想起としてではなくて、行為として再現する。つまり、自分がそれを反復しているとはもちろん知らないままに、それを反復するということである¹⁷。

ここで言われている「反復」が『ドグラ・マグラ』における「夢中遊行状態」に相当することは明らかであろう。「反復は、忘却された過去を、医者に対してのみならず、その他、現在の状況のあらゆる領域にも転移する」¹⁸とフロイトが論じているように、患者＝一郎は、「忘却された過去」すなわち青秀の過去を、モヨ子や「舞踏狂の少女」に転移させながら再演するのである。

トラウマを治療するために、医者は、患者が「行為を通して放散したがっていることを想起の作業によって処理する」¹⁹、すなわち、患者を反復から想起へと導いていかねばならない。しかし、正木の「狂人の解放治療」の真の狙いは、遺言書で告白されているように、「治療」よりむしろ、「胎児の夢」（心理遺伝論）の「実地試験」にあった。正木が九州大学精神病科に設置した「解放治療場」は、正木の心理遺伝論を証明すべく呉一郎のために設置された箱庭であり、正木は一郎に「暗示」を与えることで、「変態性欲の心理遺伝」の発作を起こそうとする。つまり、正木の実験の目的は、呉青秀という呉一郎の不気味な分身を呼び起こすことにあるのである。

呉家に伝わる絵巻の由来記によれば、呉家の祖先である呉青秀は玄宗皇帝に仕える絵師であり、楊貴妃に溺れて国事を忘れた主君を諫めるため、①夫人の黛をモデルとし、その死体が腐乱してゆく様子を克明に描いた絵巻（九相図）を送り、人間の肉体のはかなさ、人生の無常さを訴えようとした。黛は、青秀の犠牲となることを喜んで受け入れ、山中の画房で絞め殺される。青秀は絵巻の制作に取りかかるが、死体の腐敗の進行が早く、絵が未完成のまま黛は白骨化してし

¹⁶ジークムント・フロイト「快原理の彼岸」、須藤訓任・藤野寛訳『フロイト全集 一七』岩波書店、二〇〇六年、八五頁。「快原理の彼岸」は、「快不快原則を超えて」として一九三〇年に翻訳が出版されている（対馬完治訳『フロイト精神分析学全集第四巻 快不快原則を超えて』春陽堂、一九三一年）。

¹⁷ジークムント・フロイト「想起、反復、反芻処理」、道旗泰三訳『フロイト全集 第一三巻』岩波書店、二〇一〇年、二九九頁。翻訳は、「想起、反覆、並びに徹底操作」として一九三二年に出版されている（大槻憲二訳『フロイト精神分析学全集第八巻 分析療法論』春陽堂、一九三二年）。

¹⁸フロイト、同書、三〇〇頁。

¹⁹フロイト、前掲書、三〇三頁。

まう。そこで、②青秀は絵の新たなモデルを得るために、墓を暴いて死体を盗もうとするが、失敗する。最後に、③恋人の墓参りに来た妓女を鋏で叩き殺すが、村人に見つかり、未完成の絵巻とともに画房を後にする。都の家に逃げ帰った青秀を待っていたのは、黛の双子の妹、芬であった。安祿山の反乱によって、玄宗皇帝も楊貴妃もすでにこの世にないことを知らされ、茫然自失とした青秀は、芬とともに各地を放浪、海を旅している最中に遭難し、渤海使の交易船に救われ日本へと向かう。途中、青秀は船から消え失せてしまうが、芬は男子を出産、唐津に辿り着き、呉家の祖先となるのであった。

正木の（精神）分析によれば、青秀発狂の顛末には「忠勇義烈がいつの間にか変化して、純然たる変態性慾ばかりになって行く過程が遺憾なく窺われる」。また、喜んで青秀の手にかかった姉の黛、姉の服を身につけて青秀の帰りを待つ芬にも変態性慾が認められるという。

一郎の母、千世子から呉家に伝わる絵巻を手に入れた正木は、千世子を殺害、絵巻を一郎に見せ（暗示）、彼に遺伝する青秀の変態心理を賦活することに成功する。青秀に取り憑かれた一郎は、①許嫁のモヨ子を絞殺し、死美人画を描こうとしたのである。言うまでもなく、これは青秀による黛の殺害と九相図制作の反復である。正木は「自我忘失症」に陥った一郎を九州大学医学部の精神病棟に引き取り、心理遺伝の実験を続ける。解放治療場で正木が一郎に鋏を与えると（暗示）、②一郎は解放治療場の土を掘り起こす。これは、黛に代わるモデルを得るために青秀が行おうとした死体盗掘の再演である。最後には、「一挺の鋏に仕かけてあった」「精神科学応用の爆弾の導火線」（暗示）が発火し、③一郎は舞踏狂の女を鋏で叩き殺した。これも、青秀による妓女殺害の反復強迫である。こうして正木の実験は、「空前の成功を告げると同時に、絶後の失敗に終わった」。一郎の反復強迫は、正木の心理遺伝論を実証すると同時に、治療の失敗を帰結するのである。

このように一郎は青秀の心理遺伝を反復強迫していくのだが、正木（と若林）が、「私」とモヨ子との結婚に拘るのは、芬（＝モヨ子）の懐妊と青秀（＝一郎）の失踪というプロットが未発だからである。そして、「私」とモヨ子との間に生まれる未来の胎児——同時に、正木を祖父にもつがゆえに、正木を心理遺伝するはずの胎児——こそは、絵巻が存在するかぎり、正木（と若林）の学説を実証する生き証人になるだろう。この未来の胎児も、先祖の悪夢を反復するよう運命づけられているのだ。

2. 動物の反復強迫とレイシズム

前節では『ドグラ・マグラ』を貫く心理遺伝の主題を瞥見した。人間は動物を含む先祖代々の心理遺伝を反復強迫する生き物であり、心理遺伝に支配されていない者は存在しない。正木はこの心理遺伝論を展開して、「地球表面は狂人の一大解放治療場」という談話を新聞紙上に発表し、「普通人」の「精神生活の中には、精神病者と寸分変わらない……もしくはソレ以上のモノスゴイ「心理遺伝」が、朝から晩まで、一分、一秒の間もなく活躍している」がゆえに、「普通人と精神病者との区別が付けられない」と主張する。心理遺伝に影響された「精神病的傾向」をもたない者は存在しない以上、誰もが潜在的な狂人あるいは変態であるという前提に立つ正木の療法論は²⁰、正常／異常の境界を壊乱し、「精神病者」に対する差別と偏見を取り除こうとするものだ。

しかし、正木の言説は正常／異常の境界を壊すように見せながら、それを人種や民族の間の本質的差異として変奏することで、この二項対立を温存している。実際、正木は、呉青秀が皇帝への「忠義」のために九相図を描き、やがて発狂する顛末を、「純然たる支那式」、「こんな執念深さは日本人にはない」と語っている。芬が姉の黛の服を着て歩き回ったことも、「支那一流の、思い切った変態性慾」と分析する。つまり、正木は、一郎とモヨ子に心理遺伝する青秀と黛・芬の「変態性慾」を、日本人にはない、中国人特有の性的倒錯として他者化しているのである。

それは一郎をまなざす正木の「骨相学」の視線に、最も先鋭的に現れている。正木は「骨相学」によって一郎に「如何なる人種の特徴が混入しているか」を調べることで、「本人自身にも気づかれずにいる、隠れた性格を探し出して、その人間の発狂の状態と照し合せ」ようとする。一郎の顔は白人の肌、「蒙古人種系統を代表」する黒髪が生え際と鼻腔、アイヌ式の眉と睫毛、ギリシア型の鼻など、様々な人種のハイブリッドとして分析されるのだが、正木はこれらの人種の特徴の中で「蒙古人種系統」の鼻腔の形を犯罪素質の源として特定する。

然るに、そのような表面的に冷静な性格が、一朝にして心理遺伝の暗示によって、撃破、^{てんぷく}顛覆されてしまいますと、今まで内部に潜み流れておりました大陸民族式の、想像も及ばない執拗深刻、且、兇暴残忍な血が、^{まっしぐら}驀然に表面へ躍り出して、摩訶不思議な大活躍を演ずる事に相成りましたので、つまり只今から御紹介致します空前絶後の怪事件の真相と申しますのは、要するにこの少年の鼻の穴の中に隠れておりました蒙古人種系統の心理遺伝が、一時に暴れ出したものと、お考え下されば宜しいので御座います。

この「骨相学」的観察について、李珠姫は、「呉一郎の人種の起源は単一なものとして提示されてはいないものの、彼の犯罪性は、恣意的にも中国大陸という起源を当てがわれる」と鋭く批判している²¹。また、ミリ・ナカムラも同様に、「一郎の殺人遺伝子や近代科学などの小説中の否定的な要素はすべて、都合良く外国の空間に置かれている」として、「外国人の血」にコントロールされて日本人の女性を殺害する「自動人形」としての一郎に、「機械的不気味なもの」を読み取っている²²。

李やナカムラの議論を敷衍すれば、これは植民地主義と結びついたレイシズムの言説だといえるだろう。正木は、一郎の骨相が「日本人式の順良さ」をもつとする一方で、「大陸民族」の人

²⁰このような正木の考えは、精神分析の日本への紹介にも大きな役割を果たした中村古峯の議論と通底している。中村は、「変態とか常態とか云ふ区別は、単に程度の上の差に過ぎないものであるから、どんな激しい変態現象でも、吾々の普通の精神状態に於て、総ては其の萌芽を持つてゐるものである。だから厳密に云へば、如何に聖人君子として尊ばれてゐる人でも、場合に由つては犯罪者となり得る素因を持つてゐるものであり、又如何に精神状態の円満に発達した人と雖も、事情によつては精神病者となり得る素質は持つてゐるものである」と述べている。中村古峯『変態心理学講義録 第一篇』日本変態心理学会、一九二一年、一〇頁。中村古峯が主宰した雑誌『変態心理』の『ドグラ・マグラ』への影響に関しては、小林梓「『変態心理』と『ドグラ・マグラ』——正木教授の人物設定に基づく一考察——」（『国文目白』二〇一三年二月）が詳細な検証を行っている。

²¹李、前掲論文、七〇頁。

²²Nakamura, *ibid*, pp.20-21. 引用は拙訳。

種の特徴を「執拗深刻、且、兇暴残忍な血」と断定する。論文「胎児の夢」では、この「兇暴残忍」という性格は、動物に近いとされる「野蛮人、もしくは原始人」の特徴と書かれていた。つまり、日本人の「血」が犯罪とは無縁の「順良さ」、正常さを表す一方で、「大陸民族」のそれは、「原人以来遺伝して来た残忍卑怯な獣畜心理」を遺伝する「野蛮人」・「原始人」の心理として他者化されているのである。このように、一郎の犯罪の「起源」は、動物的な「大陸民族」の「野蛮」性に求められているのだ。

しかし、このような正木のレイシズムは、彼の心理遺伝論自体によって掘り崩される²³。まず、正木の人種主義的な精神鑑定について検討しよう。正木は、モヨ子の心理遺伝の発作について、「呉モヨ子は、芬夫人の心理を夢中遊行で繰り返すと同時に、その姉の黛夫人が、喜んで夫の呉青秀に絞め殺された心理も一緒に繰り返しているらしい形跡があるのを見ると、二人の先祖にソナナ徹底したマゾヒズムの女がいて、その血脈を二人が表面に顕わしたものかも知れぬ」と述べている。つまり、呉モヨ子は黛・芬の変態性欲を心理遺伝しているのだが、黛・芬のマゾヒズム自体も彼女たちの祖先の心理遺伝であることが示唆されているのだ。「心理遺伝に支配されていない者はない」以上、これは必然的に導かれる帰結であろう。

そうだとすれば、同様のことが呉青秀にもいえる。心理遺伝が普遍的な現象である以上、青秀の変態心理も、彼の祖先の心理遺伝でなければならない。さらに、青秀の祖先の変態心理も、そのまた祖先の心理遺伝でなければならない。心理遺伝論を徹底すれば、犯罪の「起源」はこのように無限後退していき、最終的には人類進化の歴史の中に雲散霧消していく。それゆえ、青秀の「犯罪」もまた「犯人無き犯罪事件」と診断すべきであろう。もし犯罪の「起源」があるとなれば、それは「大陸民族」（青秀）にあるのではなく、人類の遠い遠い祖先、すなわち原生動物にまで遡る動物に求めなければならないからだ。犯罪素因を「大陸民族」に帰す正木の言説は、彼の心理遺伝論自体によって自壊するのである。

次に、正木のナショナリスティックな言説について検討しよう。正木は「大陸民族」を「執拗深刻、且、兇暴残忍な血」と特徴づける一方で、日本人の本質を犯罪と無縁の「順良さ」に求めている。しかし、その「日本人」である彼自身が「兇暴残忍な」行為に及ぶことで、遂行矛盾を犯している。正木自身が告白しているように、彼と若林は「学術のためとか人類文化のためとかいう名の下に敢然として非人道的な研究を断行して」きたのであり、「日本人式の順良さ」という人種理論は彼の言動自体によって裏切られている。「これ程に残忍な……そうしてコンナにまで非人道的に巧妙な犯罪が、ほかに在り得ましようか」と「私」が言うように、学術のために恩師の斎藤寿八を殺害し、一郎に殺人を教唆する正木こそが『ドグラ・マグラ』において最も「残忍」な人間として描かれているのだ。

しかし、心理遺伝論によれば、この正木の残忍さもまた、彼の先祖代々の心理遺伝でなければ

²³もとより、『ドグラ・マグラ』の人種差別的言説は、信頼できない語り手によって発せられるという設定によってすでに不安定化されていることを指摘しておきたい。『ドグラ・マグラ』は、日本人を正常、常態とし、「大陸民族」を狂気、変態と定位する差別的言説を、日本人であり、かつ「名誉狂兼研究狂」である「キチガイ博士」によって語らせることで、この二項対立の安定性を攪乱している。このように「狂気」の主体が語る言説という設定は、言説それ自体を「ノンセンス化」してしまうだろう。

ならないはずだ。正木の犯罪性の「起源」も、遠い祖先の「動物心理」へと後退していく。実際、学術のために「残忍」な行為も厭わず、互いにしのぎを削る正木と若林の角逐も、動物の心理遺伝の発現ではないのか。

しかし、これが前世の業^{ごう}とでもいうんだらう……先刻^{まつき}から若林が、彼奴^{きやつ}一流の御叮嚀な遣り口で、そろりそろりと催眠術みたような暗示を君に与えながら、自分の勝手のいい方向に、君の頭を引っ張り込もうとしている態度を見ているうちに、吾輩の持って生れた^{かん}癩の虫がジリジリして来た。その若林の見え透いた手^{うち}の中がゾクゾクする程イヤ味になって来たので、一つ逆襲してやれという気になって、ここへ出て来た訳なんだが……。

正木は『『因果応報』もしくは『輪廻転生』の科学的原理』として心理遺伝を発見し、生涯の研究テーマとしてきたのだから、「前世の業」という言葉によって、彼は自己の細胞の中に潜在する先祖の遺伝、自分が反復強迫する先祖の記憶に言及していることになる。正木の先祖の罪業^{かん}が何であったかは、テキストの中では明らかにされていない。しかし、彼には「持って生れた癩の虫」(傍点引用者)、つまり「虫の心理」の遺伝があるらしい。

実際、正木との対決の後、部屋に取り残された「私」は次のような思いにとらわれる。

私は頭を一つ強く振った。……そんなものをつなぎ合わせて、飽く迄も私を学術の餌食にしようとしている、眼にも見えず、手にも取られぬ因果の網を搔き払うかのように、眼を閉じたまま両手を動かした。

……狂人の暗黒時代を背景にして、私を捉えるべく糸を操っているその網の主というのは、学術界に棲息している二匹の大きな毒蜘蛛^{どくぐも}である。曠古の精神科学者 M と、無双の名法医学者 W である。……その中でも M が私に投げかけた網の恐ろしかった事……私は今の今まで全力を挙げて抵抗して来た。[中略]

……けれども……けれども私の背後には今一つの強敵が控えている。その強敵 W は、或はこの場の光景までも見透かして、冷笑しているかも知れぬ。それ程に抜け目のない、堅実な網を張って、私が落ち込んで来るのを待ち構えているに違いない。

「私」を心理遺伝という「因果の網」に捕らえて「学術研究の餌食」にしようとする M と W という「二匹の大きな毒蜘蛛」——「心理遺伝の大家」になったと正木からお墨付きをもらった「私」が紡ぎ出すこの動物のレトリックは、比喩的な意味を超えて、字義的な意味を前景化させている。なぜなら、正木の「胎児の夢」には次のように書かれてあったからだ——「低級、卑怯な人間のする事は皆、かような虫の本能の丸出しで、俗諺にいう弱虫、蛆虫、米喰虫、泣虫、血吸虫、雪隠虫、屁放虫、ゲジゲジ野郎、ポーフラ野郎なぞという言葉は、こうした虫ケラ時代の心理の遺伝したもの^あの^あら^われを指した軽蔑詞に外ならない」。そうだとすると、M と W を形容する「毒蜘蛛」という「軽蔑詞」も、「虫ケラ時代の心理の遺伝したもの^あの^あら^われを指し」ていることになる。つまり、「非人道的な研究」に手を染める正木と若林の「研究狂」も、「毒蜘蛛」の心理遺伝の発現にほかならないのである。その意味で、正木と若林は文字通りの意味で「非人

道的」だったのであり、先祖代々の「虫の心理」を反復強迫する「動物」だったので。

むすびにかえて

『ドグラ・マグラ』は、キメラのように複数の異質な動物を心身の内部に宿し、それを反復強迫する人間像を提示する。人間の細胞の中に潜在する動物は、精神の古層から「心理遺伝の亡霊」となって回帰し、主体を無意識理に突き動かしていく。動物という不気味な分身に取り憑かれた人間は、知らず知らずのうちに動物を「身をもって演じる」のである。

ただし、『ドグラ・マグラ』の心理遺伝論は、動物を否定性においてのみ捉えようとする点で、明らかに動物差別的な言説である。動物の性格をもつばら残酷性、暴力性、妄動性といった否定性によって捉え、たとえば「動物の相互扶助」(クロボトキン)のような肯定的側面から目を逸らしている。人間という種のもつ倫理の起源が動物にあるかもしれないという可能性——たとえば、「私」の「良心」が「動物心理」に由来する可能性——は考慮されず、動物はもつばら、人間の主体性や自由を制限し、犯罪や狂気へと導く否定的潜在性として、乗り越えの対象としてしか考えられていない。

他方で、『ドグラ・マグラ』の動物は、ナショナル・アイデンティティを混乱させ、自己差異化の運動に巻き込んでいく。『ドグラ・マグラ』は、日本人を善良な民族として本質化し、悪の素因を他民族へ投影する人種差別的な言説を含んでいた。しかし、本論で確認したように、このような人種理論は、小説に書き込まれた「心理遺伝」論そのものによって瓦解する。人間に潜勢する動物は、分割・代替不可能なものと想定された個人の概念のみならず、人種や民族という概念を不安定化させ、危機に陥れる。先祖の心理遺伝を反復するとき、「私／呉一郎」は日本人なのか中国人なのか、あるいは人間なのか動物なのか、もはやわからない。「順良」な「日本人」であるはずの正木や若林も、「非人道的な研究」に取り憑かれているとき、彼らは「日本人」なのか、あるいは「毒蜘蛛」なのか決定不能となる。『ドグラ・マグラ』において、人種・民族間の境界や人間と動物の境界はきわめて不分明になっていく。人間が動物を反復強迫する存在であるとすれば、日本人はつねにすでに「日本人」ではありえず、人間もつねにすでに「人間」ではありえないのである。以上のように、『ドグラ・マグラ』は、悪を外部化することで仮構的に内を特権化するレイシズム・ナショナリズムを含んでいた。しかし、『ドグラ・マグラ』のプロットを駆動する心理遺伝論——動物の反復強迫——には、そのようなレイシズム・ナショナリズムを内破する契機が孕まれていたのである。